



題字は、明治 39 年 10 月 1 日陸軍大臣寺内正毅から外務大臣林董宛に提出した文書（外交史料館所蔵）より抜粋。  
紋様は、尾形光琳：『八橋蒔絵硯箱』東京国立博物館所蔵より。

**目次**

- 第二海堡見学会について
- 『東京湾海堡の今後について』意見募集
- “海堡”をテーマにシンポジウム開催
- 「東京湾学から見た海堡」高橋在久
- 海堡関連新聞記事
- 会則／コラム【高橋真八】／入会案内

◆ “海堡”をテーマにシンポジウム開催◆

高橋在久会長、会員の岡田昌彰氏がパネリストとして話をされました。

**ペリー来航 150 周年記念 東京湾海堡シンポジウム**  
**『明治 大ロマン 第三海堡のフロンティア精神』**

日時：平成 15 年 12 月 13 日（土）13 時～17 時  
場所：横須賀芸術劇場（大ホール）  
主催：国土交通省 東京湾口航路事務所  
共催：横須賀市

**第二海堡見学会について**

第二海堡の見学会は、冬の間は波が高く欠航になる可能性が多いため、開催いたしません。次回開催は、6月5日（土）になりました。

**『東京湾海堡の今後について』意見募集**

第三海堡は撤去工事中ですが、現存する第一海堡と第二海堡の今後について、皆様から意見を募集します。シンポジウムを開催し、東京湾海堡ファンクラブとして意見をまとめたいと考えております。

E-mail あるいは郵送で事務局宛にご送付願います。字数は問いません。

また、お寄せいただいたご意見は、『海堡』に掲載させていただきます。

多くのご意見をお待ちしております。

●概要

東京湾海堡建設の意義を広く一般市民に理解していただくことを目的に国土交通省・東京湾口航路事務所※が「東京湾海堡シンポジウム」を 2003 年 12 月 13 日（土）よこすか芸術劇場にて開催した。横須賀市民を中心に一般公募で集まった約 740 人が講演やパネルディスカッションに聞き入った。

※東京湾口航路事務所は、第三海堡の撤去工事を行っている。



講演する津本陽氏（よこすか芸術劇場 12月13日）

●内容

12月13日（土）、ペリー来航 150 周年記念のイベントとして、国土交通省・東京湾口航路事務所が「東京湾海堡シン

ポジウム」を横須賀市との共催で行った。『明治 大ロマン 第三海堡のフロンティア精神』と題し、歴史作家の津本陽氏の記念講演、軍事史と郷土史の専門家による講演、パネルディスカッションによって東京湾海堡が語られた。

### 津本陽氏の講演

津本陽氏は講演の中で、「江戸湾口は、江戸の市民のための物資の輸送面で最も重要な海路であった。ペリーが来て、アメリカとの修好条約をすぐに結んだのは、江戸湾を外国船によって封鎖されては江戸に物資が入ってなくなってしまうからだ。防衛のために東京湾口のような水深の深いところに海堡を造ったという明治政府の決断は大したものだった。日本は創意工夫をする国民の力がある。」と語った。

### 原剛氏の講演

防衛研究所の原剛氏は、東京湾海堡の建設経緯と技術的な特徴について講演し、東京湾の防衛が重要だったこと、世界に例のない大工事であった海堡建設に貢献した技術者を紹介した。

### 高村聰史氏の講演

横須賀市市史編纂室の高村聰史氏は、東京湾海堡の築造技術が明治 39 年にアメリカの要請により提供されていた文書を紹介し、日本の海堡築造の技術が人工島建設の世界トップの水準であったことを示した。

### パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、テーマを『東京湾口から発信する過去と未来』とし、(社)日本経済研究センターの森野美德氏の進行で、(社)日本港湾協会副会長の小野寺駿一氏、東京湾学会理事長(当ファンクラブ会長)の高橋在久氏、近畿大学講師(当ファンクラブ会員)の岡田昌彰氏、(財)国際臨海開発研究センター国際港湾政策研究所長の上田寛氏、原氏、高村氏の6名によって、海洋港湾技術、東京湾学、景観、軍事、郷土史などの視点から活発に議論された。その中で、それぞれの分野からみて文化財としての価値が非常に高いことを確認した。さらに、東京湾の船舶交通を観察する最適な場所にあるため、今後は活用に向けて検討する必要性を共通の認識とした。



パネルディスカッションでは、海洋港湾技術、東京湾学、景観、軍事、郷土史などの多方面から海堡について語った。

(よこすか芸術劇場 12月13日)

東京湾海堡シンポジウムのうち、高橋会長の発表を以下に紹介する。

## 東京湾学から見た海堡

会長 高橋 在久

### 東京湾学とは

首都圏の地域学として東京湾学を構想し、「東京湾と沿岸地域の、自然の水土と、水界民の文化を、学際的に根源と推移を、考察し展望する地域学。」と整理し、久しい間こだわり実験しながら提唱してきた。1995年に社会的な認知を得て、学際性と大衆性を基本にし、独自の海を核にした東京湾学会を設立して、順調な活動をして現在に至っている。

### 海堡とは

東京湾東岸の富津岬洲元で生育した私の原風景には、富津岬と先端の海堡群が好奇心と共にある。しかし少年期における海堡群は立入り禁止で、250間(約455m)の距離をおくことが強制された。1945年の太平洋戦争後の青年期を迎えてから、禁制は消滅し好奇心のままに探索ができた。少し昔のことではあるが、『日本築城史』の浄法寺朝美氏と二人でNHKテレビで問題にしたこともある。

東京湾口だけにあるこうした海堡とは、飛行機以前の大艦巨砲時代の明治政府が、首都東京と横須賀軍港の防衛用に島を築き、砲台を備えた湾口での迎撃のための要塞である。こうして第一海堡を富津市黒塚に第二海堡を同市洲端に、さらに第三海堡を横須賀市走水中瀬に建設した。しかし第三海堡は1923年の関東大震災を受け崩壊し、国土交通省によって現在撤去中なので、近代遺跡としての海堡は富津市の二島だけ

といえる。

### 海堡の真義

2002年8月に文化庁の検討会で、海堡などの近代遺跡（軍事関係）の詳細調査方針が決まった。このことは海堡の「国指定史跡」とは直結していないが、幸いこの調査員は本日の講演者・高村聰史氏と聞き、私は学識と努力を信頼し国指定を期待している。こうした現状は海堡の歴史性が基本にあり、「国指定史跡」の価値が予想されたからだが、私は東京湾学の立場から現代性も加えたい。

東京湾口の海堡の第一義は歴史遺産だが、構築以来の付加価値といえる現代性もある。まず海堡は富津岬と一連になって、対岸の猿島や観音崎と共に湾口のランドマークになり、漁船は漁場を確認する時のアテにし、外洋船は往来する航路の安全のためのアテにしてきた。さらに海堡には魚介が集散する漁礁の効用もあり、第三海堡の撤去はこのため着工まで曲折があった。要するに海堡は歴史性に現代性が付加し生きている。

### 保護と活用

以上東京湾学から海堡にこだわり受けとめた真義だが、過ぎた夏の日に「海堡技術の米国への提供」を知った。国土交通省東京湾口航路事務所の調査結果で、読売新聞（平成15年7月27日付・横浜版）の報道では、1906年の日米政府間でのことである。とにかく学芸技術は欧米に学んでいた明治時代に、いかに高度の構築技術があったかの証明で、海堡の真義の歴史性が一層重厚になったといえる。

時代と共に生きている海堡の「国指定史跡」を願望し、積極的な保護と幅広い活用に努めたい。パネリストとして参加した私の本音である。

東京湾海堡シンポジウムは、神奈川新聞、日本海事新聞、港湾新聞などに取り上げられ、海堡の存在は横須賀を中心に注目され始めている。

最近では、当ファンクラブ事務局にテレビ局2社から海堡についての問い合わせがあったり、インターネット上の百科事典のサイトから当ファンクラブホームページへのリンクの申し出があったり、海堡への関心が高まっている。

### 海堡関連新聞記事

## 社説

### 第三海堡シンポ

「第三海堡（かいほう）」を「存じだろか。そしほ東京湾口部。タンカー、コンテナ船などの出入港船舶がひっきりなしに行き交う浦賀水道航路に残る旧日本陸軍の要塞（ようさい）」である。

明治の遺構。しかし、海の上。軍事機密というペールは、市民を寄せ付けない存在だったといっている。それが名実ともに、日の当たる存在になるようとしている。「お披露目」はこの十三日。「明治 大正ロマン 第三海堡のフロンティア精神」と題したシンポジウムが当日午後一時から、横須賀

芸術劇場（京急汐入駅前）で開催されるのだ。

三十年近い月日をかけて完成した岩（とりで）は、しかし、完成後わずか二年で倒壊、機能を失った。関東大震災（一九三三年九月）が原因だった。この「悲劇の主人

## 日本発「明治のハイテク」

の発見は実に興味深く、かわる人たちの想像を十分過ぎるほど駆り立てている。

基本は軍事機密。しかも、時代は百年前にさかのぼる。資料も散逸し、生きた証人は皆無である。そうした悪条件下での調査だが、

の技術を活用することはなかった。しかし、専門家ならずとも、夢とロマン、そして誇りを感じる史実ではなからうか。

西欧の技術を吸収しつつ、古来の築城技術が生かされたという推測もある。登場人物は歴史上の有

名人から、名もなき庶民まで多彩だ。人間ドラマもあるだろう。

シンポジウムの記念講演は歴史小説で知られる直木實作家の津本陽さん。港湾技術の専門家らによる講演がある。討論のテーマは東京湾口から発信する過去と未来。撤去作業を進める国土交通省・東京湾口航路事務所の主催だ。国の出先機関が、ロマンを演出、「明日」を探るのは楽しい。

入場は無料。参加希望者は九日までにフアクスで港湾空間高度化環境研究センターに申し込む。フアクス03(5443)5412。ホームページ上でも可。アドレスは <http://www.wabg.or.jp/>

東京湾の入り口に建設された直後、関東大震災（一九三三年）の影響で海中に没した人工島「第三海堡（かいほう）」で十五日、重量約千二百トンの兵舎とみられる巨大な構造物（幅二十呎・奥行き十二呎・高さ五呎）が引き揚げられた。

船舶航行安全のため、国土交通省は二〇〇〇年から、撤去工事を進め、八呎の海中から約八十年ぶりに

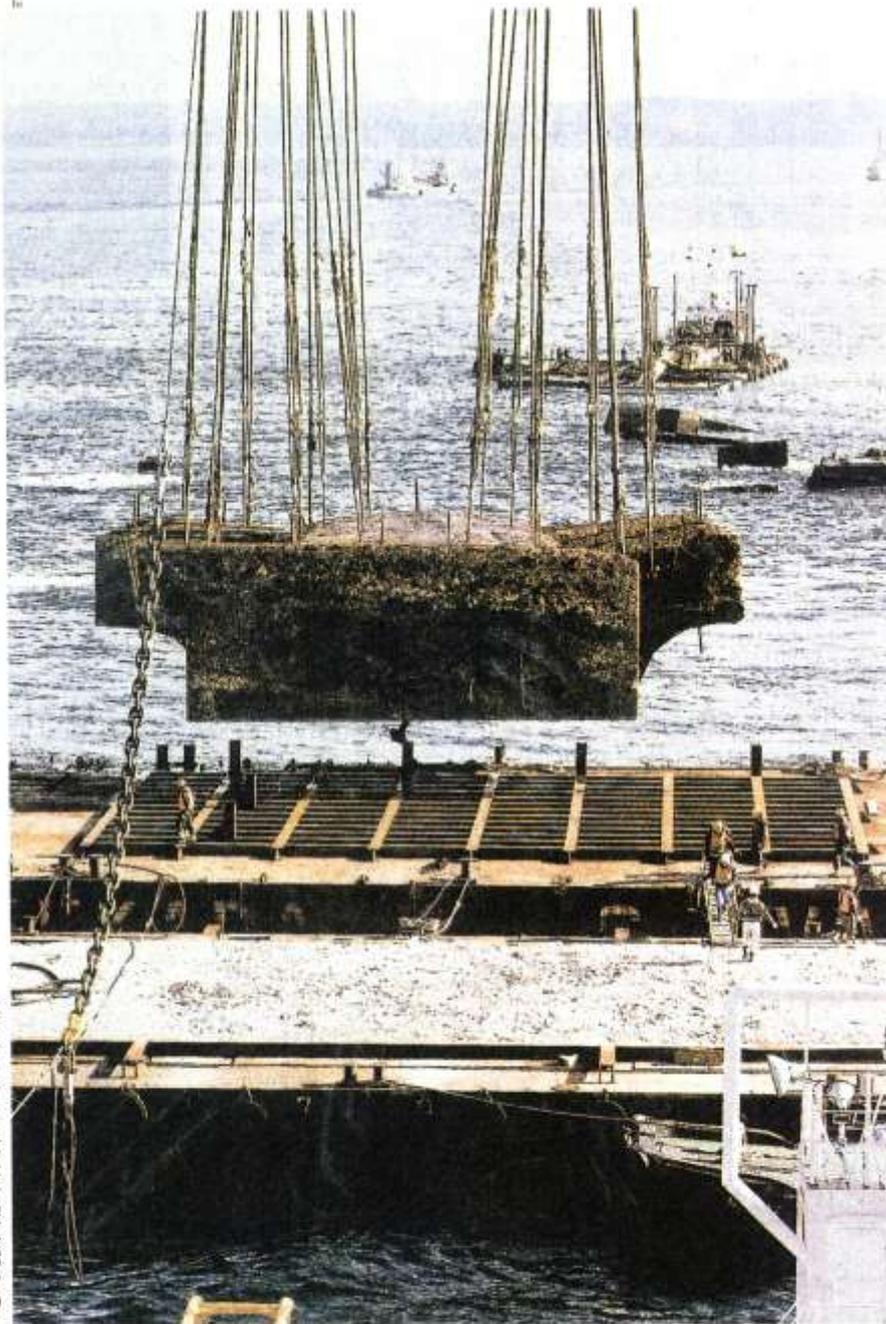
## 第三海堡の巨大兵舎？

### 約80年ぶりに「日の目」

ている。これまでに約五千個の構造物が引き揚げられているが、今回が最大級の構造物になるという。

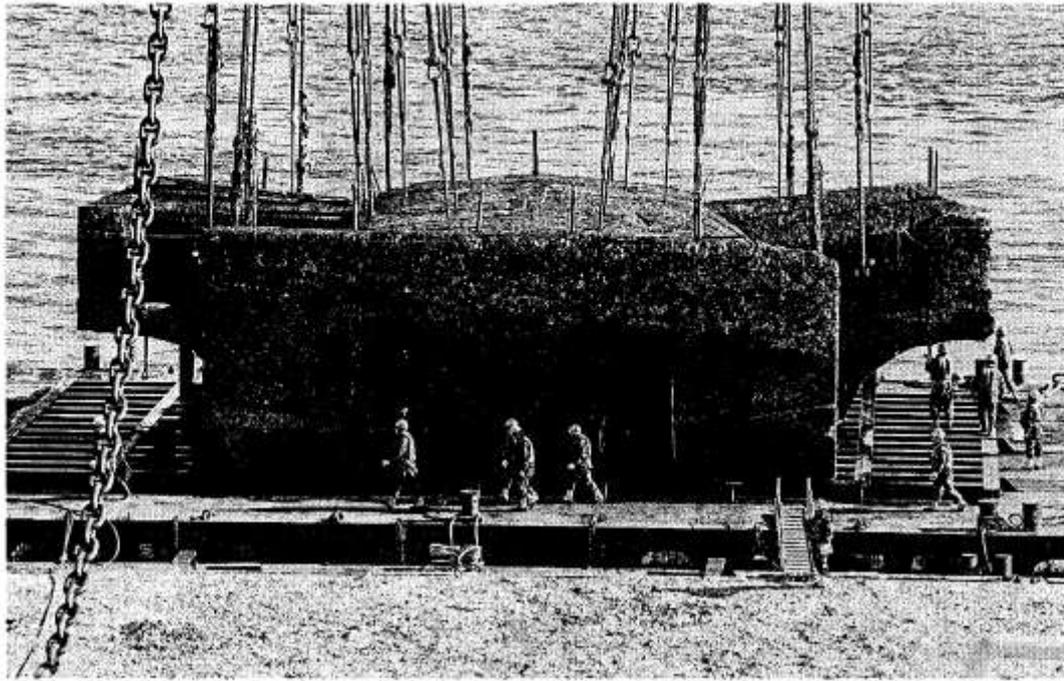
「日の目を見る」ことになった構造物は、三十二本のワイヤに引っ張られながら、ゆっくりとしたスピードで姿を現した。

海上に浮く巨大な起重機船の三ノクレーンによって台船に載せられた構造物は今後、「第三海堡構造物追浜展示施設」（横須賀市浦郷町）まで運ばれ、陸揚げされる。整備終了後に一般公開される予定。問い合わせは、同省東京湾口航路事務所 046（828）8310。



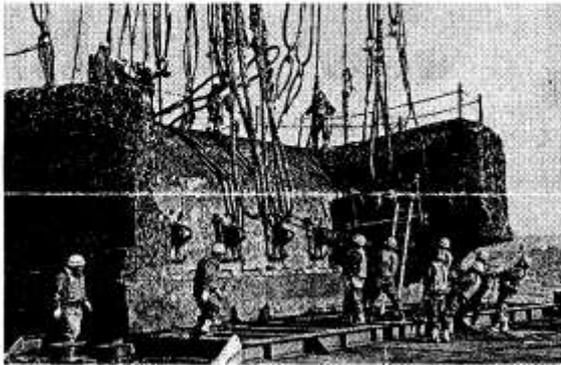
32本のワイヤで海中から引き揚げられる第三海堡の兵舎とみられる巨大構造物＝横須賀市走水沖（山田 信次写す）

巨大構造物は台船に載せられた。その後、追浜の展示場に運ばれた



# 消えた要塞現る

## 「第三海堡」撤去



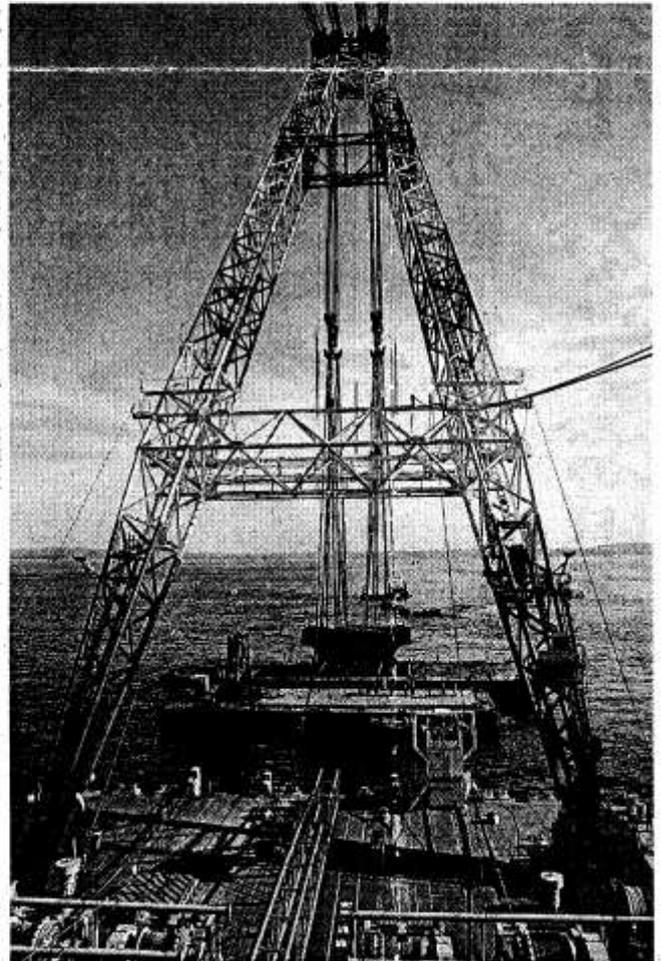
旧日本陸軍が二十九年の歳月をかけて建設した直後、関東大震災でその役割を果たすことなく海に消えた補給水道の海上要塞（よろさい）「第三海堡（かいほつ）」の撤去工事で、兵舎とみられる過去最大級のコンクリート製構造物が、約八十年ぶりに引き揚げられた。

重さ約千二百ト、幅二十ト、奥行き十二ト、高さ五トの船で、ダイバーらが引っ掛けたワイヤ三十二本を使い、海中八メートルから巨大構造物をつり上げた。

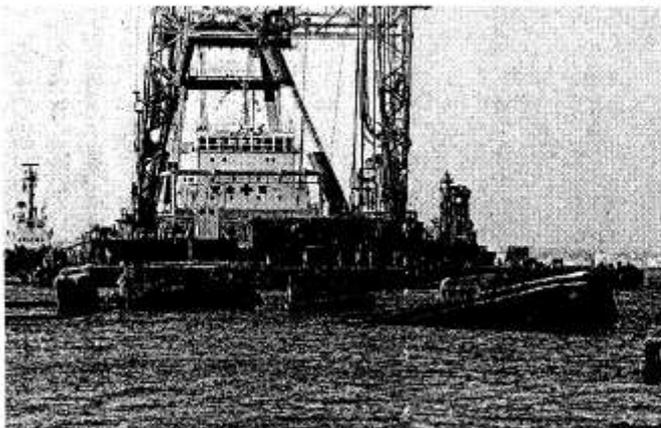
第三海堡は船舶航行の難所。安全確保のため国土交通省が二〇〇〇年から〇七年までの予定で撤去作業を進めている。



↑ 計50人の作業員の手によって姿を現した巨大構造物



巨大クレーンで引き揚げられた構造物



暗礁と化した第三海堡の一部が今も海上に頭を出している

# 歴史遺産に思いを

## 第三海堡 構造物を一般公開

横須賀

関東大震災（一九三一年）で沈下した東京湾入り口の人工島「第三海堡（かいほう）」の撤去作業で引き揚げられた構造物の一般公開が十八日、横須賀市浦郷町の追浜展示場で行われた。団体の見学には応じていたが、一般公開は今回が初めて。二十、二十五、三月



兵舎とみられる巨大構造物（左）などが展示されている  
横須賀市浦郷町

三、十日にも公開される。撤去作業は国土交通省東京湾口航路事務所が二〇〇〇年から実施している。一月十五日にはこれまで最大級の、兵舎とみられる巨大構造物（重さ約千二百ト）が引き揚げられ、注目を集めた。展示場にはこの構造物を始め、砲台部の砲側庫、

サーチライトへ通じる通路、指揮官の観測所など五つのパーツが展示されている。構造物は付着した貝殻などが取り除かれ、約八十年ぶりに海中から引き揚げられたとは思えないほど損傷が少ない。一部を除きほとんどコンクリートの塊で、軍事施設ならではの頑丈な造り。見学に訪れた人たちは貴重な歴史遺産を熱心にカメラに収めていた。

三浦市南下浦町上宮田の安達将孝さん（モ）は「こんなに大きいとは思わなかった。すぐに崩壊してもつたいない気もするが、戦争で使わずに済んでよかった」と話していた。

公開は各日とも午後二時から四時まで。見学希望者は事前申し込みが必要。申し込み・問い合わせは、同事務所調査課 046（828）8310。（佐藤 浩幸）

神奈川新聞 2004年2月19日

# 名所の桜並木ピンチ

横須賀 衣笠山

## 20年前の3分の2 古木で空洞化、腐食進む



桜並木  
樹木の空洞化や腐食が進み、年々本数が減っている衣笠山公園への  
横須賀市小矢部

全国の「桜の名所百選」に選ばれている横須賀市の衣笠山公園に通じる桜並木が、危機に瀕している。古木の空洞化や腐食が進み、二十年前より三十本以上減っている。地元住民らがボランティアで下草刈りなどの手入れを続けているが、地権者との関係で手入れができない場所も。「このままでは数年で全滅してしまうのではないかと危惧している。」（佐藤 浩幸）

桜並木は、同市小矢部四丁目と参道入り口から衣笠神社までの市道約二百メートル。市緑政部の調査は、一九八三年には九十五本あったが、二〇〇一年には七十六本、〇三年には六十三本にまで減ってしまった。さらに、六十三本のうち九本は空洞化や腐食が進み、倒木の恐れがあるため「早急な伐採が必要」とされている。空洞があっても適切な手当をすれば寿命が延びるのが十八本。良好な状態なのは六本にも満たない三十六本だといわれている。参道は桜はソメイヨシノが中心で、明神から大正時代にかけて、地主の有志が苗木を植えたとはいわれている。

◆衣笠山公園 日露戦争の勝利を記念して一九〇七年（明治四十）年に開園した。約七つの園内には約二〇〇本の桜が植えられ、花見シーズンを中心に年間十五万人前後の観光客が訪れている。

「市は地権者の理解を得ながら延命に努める一方、枯れた場所には新しい桜を植えてほしい。手入れの協力は惜しまない」と話している。

◆衣笠山公園 日露戦争の勝利を記念して一九〇七年（明治四十）年に開園した。約七つの園内には約二〇〇本の桜が植えられ、花見シーズンを中心に年間十五万人前後の観光客が訪れている。

「西田明則君之碑」がある衣笠山公園は、全国の「桜の名所百選」に選ばれているほど桜並木が有名だが、その桜が危機に瀕している。

神奈川新聞 2004年1月28日

# 東京湾海堡ファンクラブ会則

## 第1条 (名称)

当会の名称は、「東京湾海堡(とうきょうわんかいほう)ファンクラブ」とする。

## 第2条 (目的)

当会は、東京湾海堡を核にして人の輪をつくり、東京湾海堡の歴史の検証と普及、遺跡の整備と愛護、ランドマークとしての理解を深め、東京湾の歴史と未来をつなぐことを目的とする。

## 第3条 (事業)

当会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 東京湾海堡に関する研究会、講演会、見学視察会の実施。
- (2) 会報の発行(年4回)。
- (3) 東京湾海堡に関する資料・情報の収集。
- (4) その他、東京湾海堡への理解と愛護を深める活動。

## 第4条 (会員)

当会の目的、事業に賛同する個人または法人(グループを含む)を会員とする。

## 第5条 (入退会と会費)

当会に入会しようとするものは、入会申込書により会長に申込みものとする。会長は、正当な理由がない限り、その入会を認めなければならない。当会を退会しようとするものは、退会届けを会長に提出し、任意に退会することができる。会員は、下記の年間会費を納入する。

年間会費は、個人会員2,000円、法人会員10,000円とする。

会費は、毎年4月に支払うものとし、会費を支払わないときは退会したものとみなす。

既納の会費は、いかなる理由があっても返還しない。

## 第6条 (総会)

総会は、当会の議決機関であり、年1回の通常総会および臨時総会とする。

- (1) 総会は、会員をもって構成する。
- (2) 総会は、会員の過半数を定足数とする。ただし、定足数については委任状をもって代えることができる。
- (3) 総会の議決は、出席した会員の過半数の賛同をもって行う。可否同数の場合は、議長の決するところによる。
- (4) 会長は総会を召集し、総会の議長を勤める。
- (5) 総会は、前年度の事業報告および収支決算の承認、当年度の事業計画および収支予算の決定、役員を選任、会則の変更、解散、合併、その他総会または役員会が必要と認める事項について議決を行う。

## 第7条 (会員の権利)

会員は、次の権利を有する。

- (1) 総会に参加すること。
- (2) 研究会、講演会、見学視察会に参加すること。
- (3) 会報の無料配布を受けること。
- (4) 収集した資料・情報を閲覧すること。
- (5) その他、当会が行う東京湾海堡への理解を深める活動

に参加すること。

## 第8条 (資格の喪失)

会員が次の各号に該当するときは、その資格を喪失する。

- (1) 退会したとき。

## 第9条 (役員)

当会は、役員として、会長1名、副会長1名、幹事(事務局長)、幹事(会計)を含め、15名以内の幹事をおく。

役員は会員から総会において選任する。役員任期は通常総会から次の通常総会までとするが、再任を妨げない。

## 第10条 (役員職務)

会長は、当会を代表し、その業務を総務する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。役員は役員会を組織し、当会の業務を行う。

## 第11条 (会計)

当会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

## 第12条 (事務局)

当会の事務局事務所は、東京都台東区東上野2-7-6東上野T.Iビル(株)地域開発研究所内におく。事務局には事務局員若干名をおく。事務局員は会長が選任する。

## 第13条 (付則)

当会則は、2003年6月21日から改定実施する。

## 役員

- |          |                          |
|----------|--------------------------|
| 会長       | 高橋在久(東京湾学会理事長・江戸川大学名誉教授) |
| 副会長      | 西田好孝(東京湾海堡建設従事者子孫代表)     |
| 幹事       | 仲野正美(横須賀市立衣笠小学校教頭)       |
| 幹事       | 安室真弓(東京湾学会理事)            |
| 幹事       | 小坂一夫(富津市文化財審議委員)         |
| 幹事       | 松本庄次(富津公民館長)             |
| 幹事       | 小沢洋(富津公民館主査)             |
| 幹事       | 鈴木元(富津滞の会会員)             |
| 幹事       | 朝倉光夫((株)ドラムエンジニアリング)     |
| 幹事       | 西田信吉((株)港建技術サービス)        |
| 幹事       | 長崎哲士(彫刻家)                |
| 幹事       | 勝巖(新横商事(株))              |
| 幹事(事務局長) | 島崎武雄((株)地域開発研究所)         |
| 幹事(会計)   | 高橋悦子((株)地域開発研究所)         |

**皆さまからのお便りをお待ちしています。**

「海堡」に投稿ください。葉書、手紙、E-mail、写真、ご意見、近況、作品、随筆など、事務局までお寄せ願います。

**E-mailを事務局までご連絡ください。**

見学会やシンポジウムの案内など、郵送より早くお知らせすることができます。

## ◆ コラム ◆

### 高橋 真八 (たかはし しんぱち) (1876~1938)

高橋真八は、明治9年(1876)7月15日、香川県綾歌郡青海村大藪(現在の坂出市大屋富町)で庄屋を務めた高橋愛三郎の長男として生まれました。松山中学在学中に徴兵となり、陸軍士官学校卒業後、中尉として日露戦争に従軍、203高地の攻略に参加して肩に銃創受け、内地送還となり、北海道登別で療養生活を送った後、明治39年(1906)築城本部に配属され、昭和7年(1932)陸軍中将・築城本部長になった人物です。<sup>1</sup> 築城の権威者として知られています。<sup>2</sup> 第二海堡および第三海堡建設を直接担当したのは、明治43年(1910)から大正3年(1914)までで、高橋の当時の階級は大尉でした。<sup>1</sup>

東京湾海堡建設を担当する2年前の明治41年(1908)、32歳の高橋は、1月12日から10日間、第二海堡の調査を行い、その後、東京帝国大学の中野初子博士(電気工学)と井口在屋博士(機械工学)を第二海堡に迎えています。同年3月23日に衆議院議員160名、30日には貴族院議員が第二海堡を参観、そのため、前日から横須賀に行き、宿泊して案内役を務めています。そして、同年5月、横浜からドイツへ渡航し、大砲工場(クルップ社)の製造工程や欧州各地を視察しています。<sup>3</sup>

明治43年(1910)に帰国し、帰国後の担当が東京湾海堡建設で、横須賀に住居を移転しています。<sup>1</sup>

後年、高橋は妻の愛子に「第三海堡の工事は、造ってもすぐに壊れてしまい、たいへんだった。船(鉄筋コンクリートケーソン)を沈めてようやく収まった。第三海堡工事が収まったので、砲工学校教官として横須賀から異動した。」と語っています。<sup>4</sup> 高橋が砲工学校へ異動になったのは、大正3年(1914)8月です。第三海堡の鉄筋コンクリートケーソンの施工年が不明でしたが、これによって、大正3年(1914)8月以前に行われたことがわかりました。

また、「セメントの耐久性を見るのは名人だった。」とも話していたそうです。<sup>4</sup> 高橋は、海堡の基礎が安定したあと、ドイツへ自ら発注した主砲の備え付けと動力源の水圧機の据付けを行いました。その作業は、1寸1秒の狂いがその操作に影響するという極めて精密さを要するものでした。<sup>5</sup>

砲工学校の教官になった高橋は、海堡建設がいかに困難だったか、また、西田明則の身命を国家に捧げ精進した話を聞いて感銘したことを生徒に語っています。<sup>5</sup>

第一次大戦後の大正8年(1919)、戦勝国日本の代表の一人として、高橋はドイツに派遣されています。そして、明治41年(1908)に渡航した同国の敗戦後の惨状に俄然とした経験から、「軍隊は国を護り、国民の権利を護るためのもので、いたずらに戦争は起こすべきではない。戦争はいかん。」と軍人でありながら周囲の人々に語っていました。<sup>1</sup>

趣味は日本刀や骨董品を集めることでした。鑑定を頼まれるほどの目利きで、日本刀を100本以上所蔵していました。写真を撮影することも好きで、ドイツへ渡航した際に撮影

した写真をはじめ、たくさんありましたが、日本刀もアルバムもすべて戦災で焼けてしてしまいました。<sup>4</sup> アルバムのなかには、海堡に関連する写真もあったと思われるだけに、残念です。

高橋は義太夫、三味線を好み、人形浄瑠璃も妻と連れだって見に行きましたが、かわいそうな話を聞くとすぐ胸をつかれ涙をこぼす人情家でした。<sup>1</sup>

海堡建設のため苦勞を共にした人たちとは絆が深く、昭和13年(1938)5月19日、63歳で亡くなるまで、毎年、東京湾海堡建設の同窓会をしていました。多磨霊園にある墓は、東京湾建設の同窓会メンバーの方が建てています。<sup>4</sup>

【高橋悦子】

註1) 牛尾保子：『戦争はいかん 平和を希った軍人高橋真八』1993.12.20

註2) 『日本人名大事典』平凡社、1937.12.20

註3) 「明治41年高橋真八日記」による。高橋の日記のほとんどは戦災で焼けてしまったが、明治41年(1908)の日記は戦災に遭わず、残っていた。

註4) 牛尾保子氏(高橋真八の次女)へのヒヤリングによる。

註5) 吉原矩：『日本陸軍工兵史』1958.4.1

〔次回は長浜佐一郎について紹介します。〕

## 入会案内

東京湾海堡ファンクラブの活動主旨にご賛同いただける個人・法人(グループを含む)の入会を募集しております。

入会希望者は、下記入事務局まで申込み用紙をご請求ください。申込み用紙は、ホームページ(<http://www.babu.jp/~kaihoufc/>)からでも入手できます。

会費は下記口座にご送金ください。

### 銀行振込口座

●東京都民銀行 御徒町(オチマチ)支店 普通預金 4011598

「東京湾海堡ファンクラブ会計高橋悦子(トウキョウワンカイホウファンクラブカイケイタカハシエツコ)」

●郵便局 00140-9-665909「東京湾海堡ファンクラブ」

会費(年間) 個人会員：2,000円 法人会員：10,000円

事務局 〒110-0015 台東区東上野 2-7-6 東上野 T.I ビル

(株) 地域開発研究所内 東京湾海堡ファンクラブ事務局

事務局長：島崎武雄 会計：高橋悦子

電話 03-3831-2916 FAX 03-3836-4048

HomePage：http://www.babu.jp/~kaihoufc/

E-mail：kaihoufc@babu.jp

## 「海堡」 *kaihou* No.5

—東京湾海堡ファンクラブニュース— 第5号

東京湾海堡ファンクラブ 2004年5月26日発行